

《資 料》

実験的企業メセナの実施報告 その2

菅 家 正 瑞

(長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」代表)

1. はじめに

本研究会は昨年、平成18年9月8日(金)から10日(日)にかけて、実験的に「メセナ」(mécénat)⁽¹⁾を実施した。「企業メセナ」の研究にあたって、その実体・内容を模擬体験することは今後の研究に有意義であろうと考えたからである。その結果については、いわば「アカデミック・メセナ」として既に報告している⁽²⁾。今年も引き続き実験的にメセナを実施したが、昨年と異なるのは、「アカデミック・メセナ」から本格的な「企業メセナ」への橋渡しの性格としたことである。「企業メセナ」は本来その企業の必要性に基づき、企業の内面的要請として実施されるものである⁽³⁾。したがって、それは、企業自身が計画し、資金を拠出し、実施し、評価して次回のメセナに生かしていくのがあるべき姿であり、企業管理の職分である。しかし、メセナという言葉さえ一般市民はもとより、企業経営者にも知られていることが少ない長崎で、一挙に本格的企業メセナを期待するのは無理というものであろう。まずは啓蒙活動的に実施し、その必要性を少しずつ関係者に理解して頂くことが必要であると思われる。今年度は、その第一歩を踏み出した記念すべき試みと位置づけることができる。ここに本報告書を公表する所以の一つがある。

注

(1) メセナとは芸術文化支援を意味するフランス語である。古代ローマ帝国の初代皇帝「アウグストゥス」の右腕と言われた「マエケナス」(Maecenas)が芸術や文化を手厚

く擁護したことから、その名をとって「芸術文化を擁護、支援すること」をメセナと言うようになった。

(社)企業メセナ協議会(編)『メセナマネジメント』ダイヤモンド社、2003年、245頁参照。

(2) 拙稿「実験的メセナの実施報告」『経営と経済』長崎大学経済学会第86巻第3号、2006年12月、225頁以下参照。

(3) 「企業メセナ」と「企業管理」との関連については、拙著『環境管理の成立』千倉書房、2006年、特に第1章 環境管理の成立、第6章 環境志向の市民化管理、を参照されたい。

2. 経緯

(1) 実施決定までのいきさつ

はじめに今回「メセナ」の実施に至った経緯について簡単に述べる。昨年度のメセナの経緯については2006年報告書をご覧頂きたいが、そのきっかけは、通常の演奏会の実施の打診であった。メセナ活動は初めての経験であったので、その経緯は試行錯誤の連続であった。時間的余裕もなかったのも、資金も企業メセナ研究会への寄付金をあてた。「アカデミック・メセナ」と述べた所以である。今年は昨年の経験を生かす事が出来たし、時間的余裕もあったので、「企業メセナ」の実施を目指した。また、今年は昨年と同じく大室晃子氏(以下大室と言う)⁽¹⁾のピアノだけではなく、チェロとヴァイオリンを加えたピアノトリオを実施することにした。音楽の内容が豊かになるし、演奏者の負担も軽くなり、聴衆に訴える力も強くなるだろうと考えたからである。共演者は、チェロは筆者の旧来の友人である奈切敏郎氏(以下奈切と言う)⁽²⁾、ヴァイオリンは本学教育学部の加納暁子氏(以下加納と言う)⁽³⁾にお願いすることとしお二人に打診したところ、快く引き受けて頂いた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

問題は、どのような企業スポンサーに協力して頂けるか、また必要な資金が集まるかどうか、である。活動はスポンサー探しから始まった。

注

(1) 大室の略歴は以下の通り。

東京生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校，東京藝術大学，同大学院を経て渡独。フライブルク音楽大学，シュトゥットガルト音楽大学大学院ソリスト課程を首席で修了し，国家演奏家資格を最優秀の成績で取得。マルサラ市国際ピアノコンクール（イタリア），ウエスカ市国際ピアノコンクール（スペイン）などの国際コンクールで入選し，シュトゥットガルト音楽大学で教鞭をとる。現在日本とヨーロッパ各地でソリストとしてのみならず，室内楽奏者，歌曲伴奏者としても活躍。また，20世紀を代表するヴァイオリニスト，ユーディ・メニューインの創設したヨーロッパのNPO団体「Live Music Now」所属ピアニストとして，社会と音楽のかかわりに強い関心を持ち，アウトリーチ活動も積極的に行っている。

(2) 奈切の略歴は以下の通り。

国立音楽大学に学ぶ。11歳より長沼康光氏にチェロの手ほどきを受ける。丹野弥之助氏，菊池俊一氏，小沢弘氏，青木十良氏に師事。またダニール・シャフラン氏にレッスンを受ける。名ピアニスト故近江康夫氏との35年に及ぶ活動で多くの名演を残している。指揮法を渡辺暁雄氏に師事。また朝比奈隆氏に多くの教えを受ける。アカデミー・ピアノ・トリオ，アンサンブル・アルスノヴァなどを経て，71年日本フィルハーモニー交響楽団に入団。同年より東京ベートーベン・カルテットを主宰。ソリストとしては1973年よりリサイタルを重ね，全国各地で数多くのソロ活動を行っている。その入魂と情熱の力演は多くの人々に感銘を与えている。12回のリサイタルを行い好評を博す。本年1月，36年間努めた日本フィルを定年退団。また指揮活動にも本格的に取り組んでいる。

(3) 加納の略歴は以下の通り。

神戸女学院大学音楽学部音楽学科卒業。クラブファンタジー賞受賞。同大学音楽専攻科修了。大阪教育大学大学院音楽教育専攻器楽専修修了。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了。神戸女学院大学新人演奏会，関西新人演奏会，朝日推薦演奏会，阪神淡路復興支援チャリティーコンサートなどに出演。2006年，長崎にてソロリサイタルを開催。文化庁芸術家等派遣事業を通して，長崎県内の小，中学校など，各地においてコンサートを行っている。故古武滋野，稲垣琢磨，辻井淳の各氏に師事。現在，長崎大学教育学部准教授，活水女子大学音楽学部非常勤講師，ジュニアオーケストラながさき講師。

昨年も、はじめは、当然ながらこの演奏会を地元企業による「企業メセナ」として実施できないか、と考えいくつかの長崎の地元企業あるいは事業所に持ちかけたが、結局引き受けては見つからなかった。その理由は様々であるが、交渉の際に感じた大きな理由としては、①長崎経済が依然として停滞気味であること、②企業や事業所にとっては時期的に見て年度の予算外の事業であること、③本企画が各企業の支援理念に必ずしも合致しないこと、④「企業メセナ」に関してまだ十分な理解や必要性が広まっていないこと⁽⁴⁾、などが考えられた。今年度においても、上記理由についてはあまり変化はないように感じられた。

注

(4) この点については後で簡単に触れるが、筆者の講義において（「経営管理論」昼間コース開講、受講生は50名程度）「企業メセナ」について尋ねたところ、「企業メセナ」についてその名称を知っている者は皆無であった。

しかし、今年度は先に述べたように本企画を「企業メセナ」として実施することにしたので、スポンサー企業を見つけることは必要最小限の条件である。また3人の演奏家には無理を言って出演料を大幅にダウンして頂いたので、スポンサー企業探しは不可欠であると同時に本企画の本質的な問題である。結果としては、スポンサー企業は何とか見つけることが出来たが、資金的にはぎりぎりでかなり苦勞した。資金を提供して頂いた、「野村證券長崎支店」、「アサヒビール（株）」、「十八銀行」、「松藤グループ」、「ラッキー自動車」、「松翁軒」様には深く感謝する。

(2) 実施内容の決定

1) テーマの決定

大室は長崎という街に惹かれ、以前より長崎でのコンサートの実現を希望していた⁽⁵⁾ので、演奏者の意向を尊重し、昨年はテーマを「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」と設定した。昨年に引き続き、今年度のメセナのテー

まも「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」とし、その第2弾とした。それに加えて、演奏内容はピアノだけでなく他の楽器も加えた室内楽に発展させ、その位置づけは前述したように長崎における本格的企業メセナへの橋渡しとした。もちろん、その趣旨から今年度もコンサートは無料とする。また、大室は長崎におけるコンサートは初めてという新人でもあったので、長崎を愛するピアニストの紹介をも兼ね、長崎を活動拠点の一つにしたいと願っている意志実現の第一歩とすることとしたことにも変わりはない。要約すれば、今年度のテーマは、昨年に引き続き、i) 長崎における企業メセナの普及・啓蒙、ii) 有望な音楽家への支援、に絞られるが、今年度の具体的目標は、i) についてはスポンサー企業の発掘、ii) については独奏に加えて室内楽の演奏という音楽領域の拡大、となったのである。より具体的に言えば、i) は「市民に愛される企業をめざして」という言葉で、ii) は「大室晃子 ピアノトリオ・コンサート」という言葉として表現することとした。

①スポンサー企業の発掘：実務的にはこれが最大の難関であった。その趣旨からしてスポンサーは長崎を代表する、あるいは長崎経済をリードする地元企業が望ましい。さらに、いきなりなり地元企業のみで出発するのは困難に思われたので、企業メセナについてその趣旨を良く理解し、立派なメセナ活動を展開している日本を代表する企業の協力も不可欠であろう。そこで、まず大企業として幾つかの企業と交渉したがなかなか快諾が得られず、途方に暮れたことがしばしばであった。しかし、幾つかの縁や偶然が重なり、「野村證券」と「アサヒビール」の協力が得られることとなった。喜びもひとしおであった。

地元企業に関しては、長崎経済界を見渡し上述した条件に相応する企業に絞り交渉を重ねた。快諾・即決して頂いた企業もあったが、多くの企業についてはいろいろな阻害要因が横たわり、交渉は困難を極めたが、結果として所期の目的にそったスポンサーを得ることが出来たと考えている。

こうして、何とかすれば赤字を出さない程度の資金を得ることが出来た。

しかし、これでひと安心と油断したのが大間違いだったことに後から思い知らされることとなった。

- ②演奏領域の拡大については、ほとんど問題はなかった。チェロの奈切はもとと筆者と同郷で、長いつきあいがあった友人であり、長崎で室内楽を演奏しようと約束していたからである。これで約束を果たすことが出来て、筆者個人としても胸のつかえが取れ喜びに耐えない。ヴァイオリンについては、長崎大学教育学部に上手なヴァイオリニストが赴任してきていたので、彼女にお願いすることとした。時期的に非常に忙しいはずであるが、快く承諾して頂いた。ついでにといっては失礼だが、我が研究会にもご参加願うこととなった。

問題は曲目である。ピアノトリオについてはベートーベンの「大公」をはじめ沢山の名曲があるが、どの曲が本プロジェクトの趣旨に合うだろうか。しかし、これは簡単に解決した。何と3人全員が、メンデルスゾーンの第1番を候補に挙げたからである。恥ずかしながら、筆者はこの曲自体の存在すら知らなかったし、聴いたこともなかった。しかし、演奏は演奏者が演奏したい曲をするのが一番である。このように、メインの曲目はすんなりと決まった。この曲はピアノが難しいと言われているが、大室は難なく弾きこなしていた。

次は、サブメイン曲の決定である。これもメインの曲目と同じく難しい選択である。あれこれ考えている時、大室から「ライブツィッヒを愛した音楽家達」というテーマでプログラムを組んだらどうかという提案があった。これは素晴らしい名案である。ライブツィッヒ(Leipzig)と言えばあの大作曲家J.S.バッハの名がすぐに挙げられるし、バッハと言えば彼の埋もれていた名曲を蘇らせたF.メンデルスゾーンの名が連想ゲームのように浮かんでくる⁽⁶⁾。

そこで、各演奏者には筆者の好みも織り込んで、バッハの無伴奏の名曲を演奏してもらうことにした。チェロは「無伴奏チェロ組曲第2番」、ヴ

ァイオリンは「無伴奏ヴァイオリン・パルテータ第2番」から「シャコンヌ」、ピアノは「クラヴィーアのためのパルテータ第1番」という豪華版である。このような贅沢なプログラムを組めるのも、「企業メセナ」であるが故にであろう。

注

- (5) 大室は自分自身で述べているように「遠藤周作」の大ファンであり、特に『沈黙』の舞台となった長崎（外海地区）に強く惹かれていた。なお、外海地区には「遠藤周作文学館」が2000年に設立されている。
- (6) ライプツィヒ、バッハとメンデルスゾーンの関係については、大室がプログラムに以下のように書いている。

ライプツィヒ（Leipzig）－バッハとメンデルスゾーンが愛した街

ベルリンから南東へ新幹線でおよそ1時間。旧東ドイツの文化の中心地として栄えたライプツィヒは、現在はザクセン州の中心の街として、文化面でも、多くを担っています。そんなライプツィヒゆかりの大作曲家、J.S.バッハとF. メンデルスゾーン。今でもこの街の人々はこの2人の作曲家を誇りに思い、さまざまな音楽会、プロジェクトを計画し、世界中からの音楽ファンを喜ばせてくれています。

J.S.バッハといえば、誰もが知っているドイツを代表する作曲家の一人であり、クラシック音楽の土台を作った大変偉大な作曲家です。音楽において最も美しいといわれる技法「対位法」という形式を完成させ、またキリスト教ルター正統派の信仰に生きたバロック最大の音楽家として、今日でも盛んに研究が行われています。

1685年に、アイゼナハというドイツ中部の都市で音楽家の家に生まれ、若くして両親と死別した後、ドイツの街を転々としながらその教会のオルガン奏者として活躍し、音楽の勉強を続けました。そして、1723年、ライプツィヒの聖トーマス教会のカントーラ、および市の音楽監督に就任します。ライプツィヒは当時より大学街として栄え、また子供の教育にも熱心でした。カントーラという地位は、教会で行われている音楽的行事（ミサ、コーラスなど）の全てに責任を持つ地位で、教会の持つ当時の役割の大きさを考えると、とても高い地位にあることがわかります。また、教育者として、教会所属の少年たちの教養全般の指導もおこなっており、まさに街の中心人物として活躍しました。彼の代表的大作、「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」などがこのライプツィヒで

作曲され、現存する200曲のカンタータのうち、180曲がこの街で生まれたといわれています。

このように活躍したバッハも、1750年にこの街で生涯を終えますが、その後はその存在すら忘れられました。生涯を純粹に音楽と信仰に捧げた彼は栄誉欲などには無縁で、生前旅をしながら名声を得ることなど考えもしなかったためかと思われます。

この忘れられた大家の作品を発見し、復活させたのがロマン派を代表する作曲家F.メンデルスゾーンです。彼は、ピアノの詩人ショパンよりは1歳年上、同じくドイツの作曲家シューマンより2歳年上の作曲家で、ユダヤ系ドイツ人として1809年にハンブルクに生まれ、ベルリンで育ちました。高名な哲学者を祖父に持ち、銀行家の父のもとで高度で洗練された教育を受け、ピアノ、ヴァイオリン、作曲のみならず、あらゆる芸術にその才能を発揮しました。恵まれた環境の中で生まれた彼の作品は、深い教養と古典的傾向を持ちながら気品に満ち、とりわけ均整のとれた美しさが魅力です。

これは彼自身がバッハの作品を発見し、魅せられ、研究を続けたこととも大いに関係があります。1829年にまずベルリンで「マタイ受難曲」を復活再演し、バッハの芸術の価値を人々に知らしめました。その後1835年には長い歴史を持つライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者となって楽団を育成しました。また1843年にはライプツィヒ音楽院を設立し（日本から、滝廉太郎が留学した音楽学校として有名です。）、38歳の若さで亡くなるまでこの街の文化面に多大な影響を与えました。メンデルスゾーンの作品は日本ではピアノのための「無言歌集」やヴァイオリン協奏曲が有名ですが、ドイツの教会では祝日の度にメンデルスゾーンの合唱曲が歌われているといっても過言ではなく、人々に大変愛されている作曲家です。

なお、ドイツ経営学をかじった筆者がライプツィヒという言葉から直ちに連想するのは、「商科大学（Handelshochschule）」が1898年にドイツで初めて設立されたことである。

2) コンサートの設定

①長崎大学医学部・歯学部附属病院の「ロビー・コンサート」

次に、このテーマに沿ったコンサートをどのように設定するか、が問題となる。まず本年度も昨年と同じく、大学の付属病院で「ロビー・コンサート」を企画した。昨年とは違った病院も候補に挙がったが、条件が折り合わず昨年同様に大学病院での実施となった。幸い、病院には「患者サービス課」が設置されているので、このコンサートは学長および病院長の承認

の下に、全面的に患者サービス課に担当して頂いた。入院患者の中には比較的元気で時間も余裕のある人たちや、コンサートを聴くことが可能な患者もいる。そのような患者さんに、生の音楽を聴いてもらうことは「音楽療法」という言葉があるように、病気やケガの回復に役立つことができるといわれている。「音楽の力」は思った以上に大きいのである。このロビー・コンサートでは、溝上課長を始め患者サービス課および輔仁会に大変お世話になった。厚くお礼申し上げる。

②福田小学校の「アウトリーチ・コンサート」⁽⁷⁾

昨年と同様に小学校におけるアウトリーチ・コンサートを企画した。学校は長崎市教育委員会に依頼し、その結果福田小学校で行うこととなった。福田地区は長崎市から東に一山越えた場所にあり、大きなマンションが建てられ、住人の多くは長崎市への通勤者である。したがって、この地域は都会の空気と田舎の空気が混ざり合った地域である。

本物の生の音楽に触れる機会がない子供達に、このような機会を提供することはとても有意義なことである。その中から一人でも多く、音楽に興味を持ち、音楽が好きになってくれる人達が増えることは、社会にとっても個人にとっても生活を豊かにすることに繋がることであろう⁽⁸⁾。

注

(7) 「アウトリーチ」(outreach)とは、一般の人々に芸術に対する潜在的なニーズや関心を喚起することで、芸術文化に関わる人々の「関係者の枠」を出て、日頃あまり芸術に触れる機会がない人や、関心がない人々に対して、なんらかの働きかけを行うことである。

(社)企業メセナ協議会編『上掲書』, 239頁参照。

(8) たとえば、菅家・佐藤『『企業メセナ』と『アブレウ博士』』『経営と経済』第86巻第2号, 長崎大学経済学会, 2006年, 103頁以下参照。

③長崎県美術館の「ロビー・コンサート」

平成17年(2005年)に開館した県美術館は、新設された長崎歴史文化博物館と並んで、文化・芸術の東京一極集中化ともいえる中で、長崎らしさを

具現化した本格的な美術館⁽⁹⁾と博物館である。本県は、これらの施設によってやっと本来の文化・芸術の拠点を持ち得たと言えるかも知れない。それはさておき、本美術館では催し物の一環として以前から一定レベルの演奏者にエントランス・ロビーを開放して「ロビー・コンサート」を実施している。そこで、今年度も美術館に申し入れたところ問題なく承認され、コンサートの運営はほとんど美術館側で行って頂いた。これは、翌日の本格的なピアノトリオ・コンサートのプレリユードとなるものである。大室の担当者であった広報担当館員の建石久美子さんに深く感謝したい。

注

(9) 本美術館は（株）日本設計 隈研吾 の設計になるもので平成17年4月に開館し、館全体をガラス張りとしたユニークな建物である。平成18年、「須磨コレクション」の展示や調査研究活動等について、スペイン政府他により組織された団体「カーサ アシア」よりスペイン文化の普及に大きな功績をしたと認められ平成18年「カーサ アシア賞」を受賞した。

④旧上海香港銀行長崎支店跡記念館⁽¹⁰⁾でのコンサート

これは、以上の一連の活動を最初に締めくくる本格的なコンサートであり、i) 本格的な企業メセナの第一歩、ii) 長崎への音楽のプレゼント、iii) 長崎への新人演奏家の紹介と育成、という本企画の目的を一本化し、収斂させた本企画のメイン・イベントの一つと位置づけられ得るものである。したがって、プログラムも既述したように練りに練ったし、演奏者も本コンサートに向かって磨きを掛けてきたはずである。チラシも、このコンサートと本プロジェクトの最後になる長崎大中部講堂におけるコンサートに焦点を合わせて作成した⁽¹¹⁾。したがって、一連の本企画が成功するか否か、あるいは評価はこのコンサートに懸かっていると言っても過言ではなく、そのため多くのメディアに後援と取材を依頼した⁽¹²⁾。

注

(10) 旧上海香港銀行長崎支店跡記念館とは、その名称からわかるように、長崎が明治以前より中国貿易の拠点であったことから設置された同銀行支店跡の建物である。建設以来長い年月が経過し古く危険になったので取り壊しの計画が立てられたが、石造りの由緒ある建物であることから反対運動が市民から湧き上がり、修理して残すことになった。現在では、手頃なコンサートや集会などに広く利用されている。

注

(11)本コンサートのために作成したプログラム。

「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」などがこのライプツィヒで作曲され、現存する200曲のコンタータのうち、180曲がこの街で生まれたといわれています。

このように活躍したバッハも、1760年にこの街で生涯を終えますが、その後はその存在すら忘れられました。生涯を犠牲に音楽と信仰に捧げた彼は愛憎放などには無縁で、生前解をしながら名声を得ることなど考えもしなかったためかと思われる。

この忘れられた大音楽家の作品を発見し、復活させたのがロマン派を代表する作曲家メンデルスゾーンです。彼は、ピアノの詩人ショパンより12歳年上、同じくドイツの作曲家シューマンより2歳年上の作曲家で、ユダヤ系ドイツ人として1809年にハンブルグに生まれ、ペルリンで育ちました。高名な哲学者を祖父に持ち、銀行家の父のもとで高度で洗練された教育を受け、ピアノ、ヴァイオリン、作曲のみならず、あらゆる芸術にその才能を発揮しました。息も吐いた頃の中で生まれた彼の作品は、深い教養と古典的傾向を持ちながら気風にも満ち、とりわけ精緻のとれた美しさが魅力です。これは彼自身がバッハの作品を発見し、触れられ、研究を続けたことも大いに関係があります。1829年に生ずペルリンで「マタイ受難曲」を復活演奏し、バッハの偉大な偉業を人々に知らしめました。その後1836年には長い歴史を持つライプツィヒ・グヴェントハルス管弦楽団の指揮者となって楽団を育成しました。また1843年にはライプツィヒ音楽院を設立し（8ま



ライプツィヒ音楽院

から、直隷太師が留学した音楽学校として存在す。）、38歳の若さで亡くなるまでこの街の文化面に多大な影響を与えました。

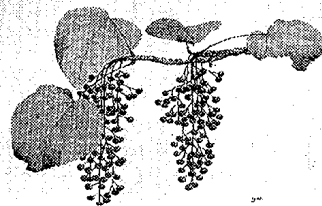
メンデルスゾーンの作品は日本ではピアノのための「無言歌集」やヴァイオリン協奏曲が有名ですが、ドイツの教会で毎週日の度にメンデルスゾーンの合唱曲が歌われているといっても過言ではなく、人々に大賞賛されている作曲家です。（久保菜穂）

長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」

「企業メセナ」（企業による芸術・文化に対する支援活動）に関する学際的、実践的研究を目的として、長崎経済学部の教員を中心として平成18年に結成された組織。研究者による研究発表や世が目の代表的企業のメセナ担当者による報告などの研究会を行っている。研究のみならず実践的にメセナ活動にも取り組んでいる。その成果は『企業メセナの理論と実践』（久保）として平成24年に刊行予定。お問い合わせは、代表者の長崎経済学部教授 菅原 正樹（おかけまちん）0958-820-6351まで。

大室 晃子

ピアノトリオ・コンサート



松 イキリ 園田 崇大

市民に愛される企業をめざして

提供：野村證券、アサヒビール（株）、松屋グループ、十八銀行、ワッケー自動車、松電機。

主催：長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」。

会場：旧上海通商銀行長崎支店跡記念館（10月4日（木）午後6時30分～8時30分）。

長崎大学文藝キャンパス中部講堂（10月5日（金）午後6時30分～8時30分）。

共催：長崎大学付属病院、福岡小学校、長崎県美術館、長崎大学。

後援：長崎県、長崎県教育委員会、長崎県工業会、長崎県経済協会、長崎新聞社、NHK長崎放送局、NHK長崎放送、RTN、NCC、NHU。

4 頁

1 頁

Program

―― ライプツィヒを愛した音楽家たち ――

1. バッハ（J.S.Bach）作曲 無伴奏チェロ組曲 第2巻二短調 BWV1008
① 前奏曲 ② アルマンド ③ クラレント ④ サラバンド
⑤ メヌエットI ⑥ メヌエットII ⑦ ジーク
2. バッハ（J.S.Bach）作曲 クラヴィーアのためのパルティータ 第1番長調 BWV824
① 前奏曲 ② アルマンド ③ クラレント ④ サラバンド
⑤ メヌエットI ⑥ メヌエットII ⑦ ジーク
3. バッハ（J.S.Bach）作曲 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2巻二短調 BWV1004 から
⑧ ジャコンタ

―― 休 憩 ――

4. メンデルスゾーン（F.Mendelssohn）作曲 ピアノ三重奏曲第1巻二短調 Op.49
第1楽章 Molto Allegro agitato
第2楽章 Andante con moto tranquillo
第3楽章 Scherzo Leggero e vivace
第4楽章 Finito Allegro mosso appassionato

大 室 晃 子（ピアノ）

東京藝術大学大学院、シットワット・ガルト音楽大学大学院修了の前進奏者のピアニスト。

菊 切 敬 雄（チェロ）

元日本フィル首席奏者、東京ベートーベン・カルテット主宰。

加 橋 純 子（ヴァイオリン）

長崎大学教育学部准教授、学校教育学専攻。

（詳しくはチラシをご覧ください）

ライプツィヒ（Leipzig）―― バッハとメンデルスゾーンが愛した街

ペルリンから南東へ約80キロ、約1時間。旧東ドイツの文化の中心地として栄えたライプツィヒは、歴史的にザクセン州の中心の街として、文化面でも多くを担っています。そのライプツィヒにゆかりの大作作曲家、J.S.バッハとF.メンデルスゾーン、今でもこの街の人々はこの2人の偉業を誇りに思い、さまざまな音楽会やプロジェクトを計画し、世界からの音楽ファンを惹きつけています。

J.S.バッハといえば、誰もが知っているドイツを代表する作曲家の一人であり、クラシック音楽の土台を築いた大偉大な作曲家です。東洋において最も美しいといわれる長崎「対馬」という形式を完成させ、またキリスト教ルター派新約の起源に生きたバロック最大の音楽家として、今日でも盛んに研究が行われています。

1685年に、アイゼナハというドイツ中部の都市で音楽家の家に生まれ、若くして両親と死別した後、ドイツの聖歌隊としてしながらその教会のオルガン奏者として活躍し、音楽の才能を伸ばしました。そして1723年、ライプツィヒの聖トーマス教会のコンテラー、およびその音楽監督に就任します。ライプツィヒは当時より大学街として栄え、また子供の教育にも熱心で、コンテラーという地位は、教会で行われている音楽的行事（ミサ、コラタなどの）全てに責任を担った地位で、当時の教会が持つ役割の大きさを考えると、とても高い地位にあることがわかります。また、教育者として、教会所長の少年たちの音楽学校の所長もこなっており、まさに街の中心人物として活躍しました。彼の代表的な作



聖トーマス教会

2 頁

3 頁

⑤長崎大学中部講堂におけるコンサート

このコンサートは、主として長崎大学の学生、教職員および周辺地域における一般人を対象として、今年初めて企画したものである。主催者は長崎大学の一員であるし、演奏者の一人は長崎大学の教員なので、このコンサートには大学関係者と地域住民への感謝という意味が込められている。そのため、学長にもコンサートの始まりにあたって、ご挨拶を御願いしていた。また、各学部にチラシを掲示してもらおうと同時に、チラシを約4,000枚コピーし、各学部の学生数に比例した枚数を学生が集まる学務係に置いてもらった。本プロジェクトを締めくくる大事な最後のコンサートである。こうしてチラシとプログラムがようやく出来上がった⁽¹³⁾。

目のコンサート場所である付属病院に向かった。

(1) 大学病院ロビー・コンサート

長崎大学の研究会が実施するメセナであるので、可能であれば後援者の一つである長崎大学で行うべきであろう。そこで、筆者も骨折で入院したりして時々お世話になり現在もお世話になっている同大学付属病院でロビー・コンサートを行った。結果は以下の通り。

主　　催：長崎大学医学部・歯学部付属病院，協賛：財団法人 輔仁会

日　　時：10月2日（火）17：30～18：00

会　　場：大学病院本館外来ロビー

聴　　衆：入院患者約90名，職員10名，計約100名。

プログラム：シューベルト；セレナード，サンサーンス；白鳥，ショパン；
エチュード黒鍵，モンティ；チャールダッシュ，メンデスゾーン；
ピアノトリオ第一番，第4楽章。



大学病院でのコンサート風景

注

(1) 病院が用意したポスターとチラシの一部

大室晃子 奈切敏郎 加納暁子

ロビーコンサート

日時：平成19年10月2日（火）17:30 ~ 18:00
場所：大学病院本館外来ロビー
主催：長崎大学医学部・歯学部附属病院
長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」
協賛：財団法人 輔仁会

大室晃子 奈切敏郎 加納暁子

ロビーコンサート

日時：平成19年10月2日（火）17:30 ~ 18:00
場所：大学病院本館外来ロビー
主催：長崎大学医学部・歯学部附属病院
長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」
協賛：財団法人 輔仁会

Profile

Pianist 大室晃子

東京生まれ。東京藝術大学音楽学部付属音楽高等学校、東京芸術大学、四大学院を経て慶応義塾大学、シエラカレッジ音楽大学大学院ソリスト課程を首席で修了し、国家演奏家資格を最優秀の成績で取得。マルサス市国際ピアノコンクール（イタリア）、ウエスカポアノコンクール（スペイン）などの国際コンクールで入選し、シエラカレッジ音楽大学で教鞭をとる。現在日本とヨーロッパ各地でソリストとしてみならず、室内楽演奏、歌曲伴奏者としても活躍。また、20世紀を代表するヴァイオリニスト、ヨーゼフ・メヌーインの創設したヨーロッパの伝（Live Music Now）所属ピアニストとして、社会と音楽のかかわりに関心をもち、アウトリーチ活動も積極的に行っている。



Cellist 奈切敏郎

国立音楽大学に学ぶ。11歳より長沼康光氏にチェロの手ほどきを受ける。丹野弥太郎氏、菊池健一氏、小室弘氏、青木中良氏に師事。またダニエル・シャフラン氏にレッスンを受ける。名ピアニスト後進江藤氏35年に及ぶ活動で多くの名演を残している。指揮法を渡辺鶴氏に師事。また朝比奈隆氏に多くの教唆を受ける。アカデミー・ピアノ・トリサンプル・フルスノヴァなどを経て、71年日本フィルハーモニー交響楽団。同年より東京ベートーベン・カルテットを主宰。ソリストとして年よりリサイタルを重ね、全国各地で数多くのソロ活動を行っている。入魂と情熱の演奏は多くの人々に感動を与えている。12回のリサイタル行い好評を得る。本年1月、36年間のめいた日本フィルを定年退団。また演奏活動にも本格的に取り組んでいる。



Violinist 加納暁子

神戸女学院大学音楽学部音楽学科卒業。クラブファンタジー賞受賞。大学音楽専攻科修了。大阪教育大学大学院音楽教育専攻音楽専修修了。兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科博士課程修了。神戸女学院大学新人演奏会、関西新人演奏会、朝日推薦演奏会、阪神府県復興支援チャリティコンサートなどに出演。2006年、長崎にてソロリサイタルを開催。文化庁芸術家等派遣事業を通じて、長崎県内の小、中学校など、各地においてコンサートを行っている。故郷武雄市、福岡県、注の各氏に師事。現在、長崎大学教育学部音楽教授、活水女子大学音楽学部非常勤講師、ジュニアオーケストラながさき講師。



大室晃子 奈切敏郎 加納暁子

ロビーコンサート

日時：平成19年10月2日（火）17:30 ~ 18:00
場所：大学病院本館外来ロビー
主催：長崎大学医学部・歯学部附属病院
長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」
協賛：財団法人 輔仁会

患者サービス課は、沢山の種類のチラシ・ポスター⁽¹⁾を用意するほどにこのコンサートの実現に熱心に取り組んで頂いた。ここで溝上課長を始めこのコンサートの実施に関わった職員に深く感謝する。

主催者のコメント：昨年に引き続き、経済学部菅家教授から大学病院でのロビーコンサートの話を頂きました。

昨年は大室さんのピアノコンサートを開催して頂きましたが、今回はピアノ・チェロ・ヴァイオリンと豪華なロビーコンサートを計画して頂きました。私たちが、コンサートのポスターを貼っていると、ある男性入院患者様は待ちきれない様子で、すごいメンバーですねと驚いておられました。

患者様には、わずか30分のコンサートでしたが、臉を合わせ聞いておられる方、首を振っておられる方等様々な姿で聴いておられるのを見て、生の音楽は患者様の心をいやしていると確信しました。楽しみの少ない入院患者様等にとっては何よりの良薬であったと思います。ありがとうございました。

最後に、大室晃子様・奈切敏郎様・加納暁子様の今後益々のご健康とご活躍をお祈り致します。(溝上課長)

自己評価：滑り出しとしてはそれなりの成果が得られたと思われる。入院生活は患者の症状によるが、時間をもてあましたり、病気が改善して音楽を聴ける人たちも結構多い。しかし、当然ながら入院生活はいわば自由が制限された拘束的な側面を持ち、精神的にも不安定になりがちである。筆者は何回か長期の入院生活を経験しているので、そのような心理状態はよく理解できる。このような状態の時に、本物で生の音楽に接することは、患者にとって大きな癒しになるに違いない。演奏会終了後の多くの患者の笑顔に接し、またアンコールを期待する表情を見ることが出来たことは、このコンサートの成功を表していると思われる。

(2) 福田小学校におけるアウトリーチ・コンサート

打合せのため2回ほど本校の岩倉範壽校長を訪ねた。体育館のピアノはア

アップライト型であるため、今までコンサートを申し込んでもなかなか実現しなかった、とのことであった。そのような環境の中でも演奏することが、アウトリーチ・コンサートには求められるのである。少しでも音楽に興味を抱いてもらうことに、アウトリーチ・コンサートの意味があるのだから。筆者はI時限目に講義があったので、終了後直ちに会場に向かった。結果は以下の通り。

主 催：福田小学校

日 時：10月3日（水）11：00～12：00

会 場：同校体育館

聴 衆：同小学校生580名，教職員28名，育英会役員など21名，計629名。

プログラム：シューベルト；セレナード，サンサーンス；白鳥，モンティ；
チャールダッシュ，ラフマニノフ；ボカリーゼ，メンデルス
ゾーン；ピアノトリオ，第4楽章，ラッフ；カバテーナ。

生徒達は初め，演奏場所から離れて座っていたので，楽器に触れることができる位まで近くに半円形に座ってもらった。演奏がはじまる最初と終わりに生徒からお礼の挨拶があった。

主催者のコメント：生の音楽に触れる機会が少ない児童達にとって，まさに息づかいが聞こえてくる近くで演奏を聴くことが出来，圧倒された様子であった。家庭に帰って，保護者に今日の演奏は素晴らしかった，また聴きたい等の感想を述べる児童が多かったというような声や，珍しく学校のことを話したといったような声を，いろいろな場面で聞いて，反響の大きさを知りました。

また，楽器の説明をして頂いた時，ヴァイオリンやチェロが100～130年ほど前のものであることを聞き，大切に使えば非常に長くもつことを実感として学習したようである。この日以降，校内でも児童達の物品に対する意識が高まり，物を大切にする場面が数多く見られるようになってきた。受け取り

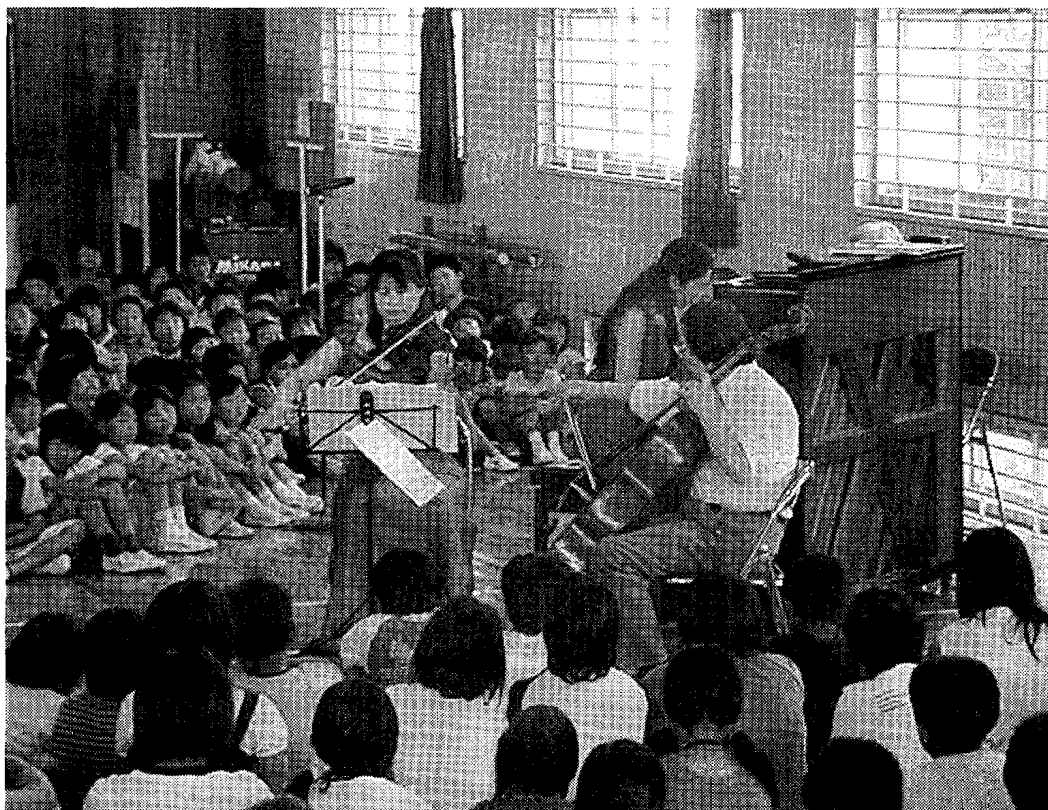
方は違うようですが、子供達の心の中に今までとは違った思い、感動を呼び起こしたようです。

演奏者は、大勢の小学生を前に緊張したとのことですが、じっと聴き入ってくれる1年生などを見て、純粹に音楽は人の心に伝わるということを再認識し、とても嬉しかった、ということでした。今回の音楽の贈り物はとても素晴らしいものでした。

児童だけでなく、我々も、言葉や意味はわからなくても、何か心に伝えることのできるすばらしさを身を以て体験することが出来たのは、今回の機会を与えてくださって菅家先生と、本校のような悪い条件の中での演奏を引き受けてくださった大室さん、奈切さん、加納さんのお陰と深く感謝しております。

今後のご健康とご活躍をお祈り致しますと共に、また機会が有れば素晴らしい演奏を聴かせて頂ければと思います。

本当にありがとうございました。(岩倉校長)



福田小学校での演奏風景

自己評価：演奏者は2回目でもあったせいか大分リラックスしていたようである。児童達は目をキラキラと輝かせて演奏に聴き入っていた。特に「チャールダッシュ」は音楽の時間で学んでいたらしく、曲が始まったらどよめき起きた。児童数が多すぎたので演奏会終了後の交流はできなかったが、児童達の心の中に大きなプレゼントを贈ることができたようである。

(3) 県美術館ロビー・コンサート

昨年も書いたことだが、美術館におけるロビー・コンサートは、これからの美術館における新しい試みの一つになるであろう。特に、同じ芸術が一箇所所で融合することは、音楽家にとっても来館者にとっても大きな刺激になるに違いない。美の追究に垣根はいらない。美術を愛する人々からの観点で、音楽を聴いて頂けるのは音楽家に新しい視点を模索させるのではないか。本館における結果は以下の通り。

主 催：長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」、共催：長崎県美術館

日 時：10月3日（水）18:00～19:00

会 場：長崎県美術館エントランス・ロビー

聴 衆：着席者約40名、立見者約10名、合計約50名


プログラム：バッハ；無伴奏チェロ組曲第2番，クラヴィーアのためのパルティータ第1番，シャコンヌ，メンデルスゾーン；ピアノトリオ第1番，全楽章。

共催者コメント：前年度同様，今年も「企業メセナ」活動で当館にてコンサートの開催をしていただいたが，前年のピアノソロからボリュームアップし，ピアノトリオという形式で各人のソロも加えながらの内容の濃いコンサートであった。平日の夜だったことや告知がやや不足ぎみだったためか，残念ながらお客様の数は前年度よりも少なかったが，夕暮れから夜にかけてのコンサートで，情景も美しく，お客様の立場から見ると，ざわざわとした

美術館が用意したプログラム

Nagasaki Prefectural Art Museum

長崎県美術館



Nagasaki Prefectural Art Museum

大好きな長崎へ音楽のプレゼント第2弾！

大室晃子ピアノトリオ・コンサート

10月3日（水）18：00～19：00

長崎県美術館 エントランスロビー

主催：長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」

共催：長崎県美術館

提供：野村證券、アサヒビール、十八銀行、松藤グループ、松葉軒、ラッキー自動車

裏表紙

表表紙

~Program~

◆チェロ独奏 チェロ：奈切敏郎

白鳥～「動物の謝肉祭」より～（C.サンサーンス）

◆ヴァイオリン独奏 ヴァイオリン：加納曉子

チャールダッシュ（V.モンティ）

◆ピアノ独奏 ピアノ：大室晃子

ボカリーゼ（S.ラフマニノフ）

◆ピアノ三重奏 ヴァイオリン：加納曉子、チェロ：奈切敏郎、ピアノ：大室晃子

ピアノ三重奏第1番ニ短調 Op.49（F.メンデルスゾーン）

第1楽章 Molto allegro ed agitato

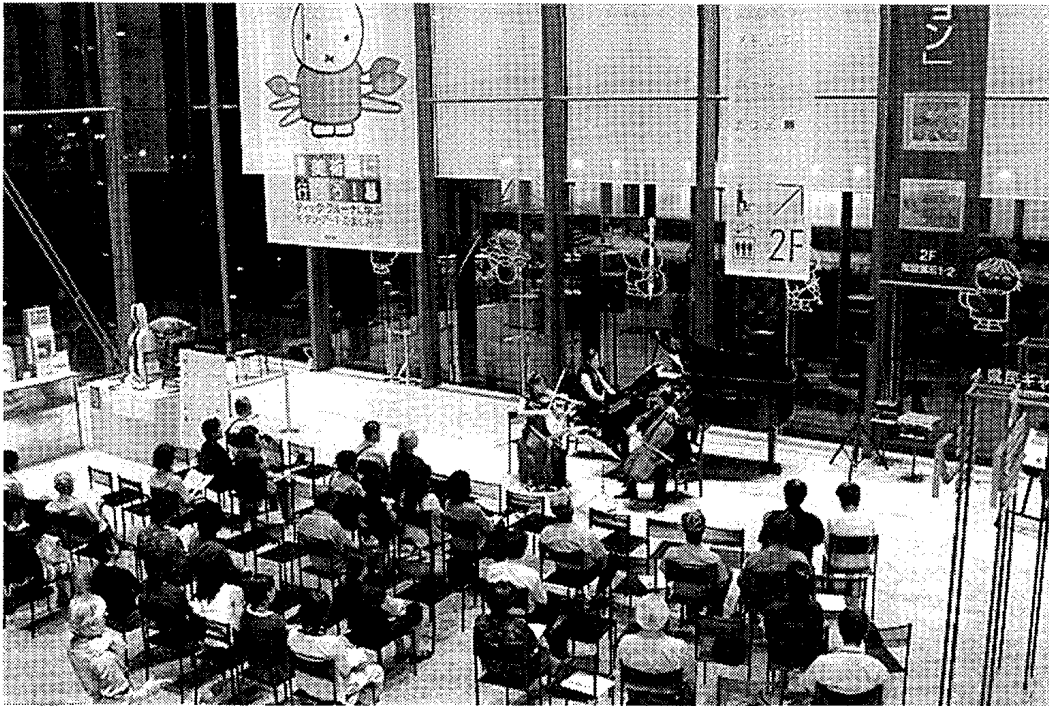
第2楽章 Andante con moto tranquillo

第3楽章 Scherzo.Leggiero e vivace

第4楽章 Finale.Allegro assai appassionato

※ プログラムは変更する場合がございます。

内容



美術館ロビーコンサート風景

中でのロビーコンサートよりも、静かな中で聴けることはとても聴きやすい環境であったのではないだろうか。曲目も、ラフマニノフ「ボカリーゼ」、モンティ「チャールダッシュ」、サンサーンス「白鳥」は耳馴染みがあり気軽に聴ける曲で、また後半のメンデルスゾーン「ピアノ三重奏曲第1番」は本格的な室内楽と十分すぎる内容で、クラシックに興味があり詳しい方から、あまり身近に無い方まで楽しめたコンサートだった。

当コンサート開催するに当たってご尽力頂いた経済学部菅家先生を始め、ピアニスト大室さん、チェリスト奈切さん、ヴァイオリニスト加納さん、そして協力頂いた企業の皆様に改めて御礼を申し上げます。

アンケート調査の結果と分析：27件（約50名中）

エントランスロビーと言うことで、この場所で開催するコンサートは「偶然聴いた」と言う回答が多い中、約75%の方が目的客だったことはとても貴重な結果である。昨年に引き続き、「大室晃子さん」と言うアーティストを迎えて開催したことによって、目的客が多かったのではないだろうか。企業

メセナ活動として、新しいアーティストを毎回迎えることももちろん大切だが、同じアーティストを応援し続け、ファンを増やすことで、アーティストの活動の場所を提供し、かつその土地の文化的向上が図れることの意義を垣間見た結果だったと思う。(県美術館広報・マーケティング担当：建石久美子)

自己評価：本コンサートは、美の中心である美術館でのコンサートであり、それなりの審美観を持った聴衆が予想され、また、翌日の本格的リサイタルのプレリユードと位置づけられものである。したがって、演奏者達もそれを意識していたと思われるが、予行演習的なコンサートも3回行っているのも、普段の実力が発揮できたものと思われる。メンデルスゾーンのピアノトリオの演奏は、練習の段階から数段向上し、ほればれするほど素晴らしいものであった。

このコンサートを準備しアンケートを実施し分析までして頂いた建石久美子さんに感謝する。

(4) 旧上海香港銀行長崎支店跡記念館リサイタル

本コンサートは、一連の演奏会のメインイベントといってもよい本格的なリサイタルである。本メセナの実験が成功するか否かはこれに懸かっていると言っても過言ではないであろう。リサイタル形式も通常の方式であり、昨年に引き続き大室の長崎での評価もこれで決まると言っているかもしれない。演奏自体については、既にこれまでのコンサートの流れから見て問題はない。最大の関心はどれだけの入場者があるかどうかである。結果として、筆者の楽観主義は見事に裏切られた。

日 時：10月4日（木）18:30～20:30

会 場：旧上海香港銀行長崎支店跡記念館一階

曲 目：プログラムの通り。

聴 衆：40人程度

主催者のコメント：演奏内容は実に充実したものであった。数少ないアン

ケートでも「素晴らしい演奏だった」という感想がほとんどであった。同時に、昨年聴いた方も数人おり、「ピアノは去年より上手になっていた」「シャコンヌに鳥肌が立った」という記述もあった。また、当然ながら「もっと宣伝をして集客に努力して欲しい」という意見も多数あった。回収数は17枚しかなかったため、ここから何らかの結論を出すことは出来ないが、参考のためその結果を示す。(複数回答あり、女性が12名で高齢者が多い)

- ①「企業メセナ」の認知度：「知っていた」が11名、「知らなかった」が7名で、昨年より前者が増大している。
- ②「企業メセナ」の可否：「企業は社会的貢献として積極的にすべきである」が16名で圧倒的に多い。
- ③「芸術活動」の維持・発展の主体：「政府中心」が9名、「国民個人」が3名、「民間団体」が7名、「企業中心」が6名で、「政府中心」と「国民中心」が多かった。
- ④長崎における「企業メセナ」の実施：「あまり行っていない」が11名、少しは行っているが5名であった。筆者は長崎企業は結構メセナの活動を行っていると感じているが、問題はその意図にあると思われる。
- ⑤長崎の企業は「企業メセナ」を行うべきか：「大に行うべき」が3名、「少しは行うべき」が3名、「余裕があれば行うべきである」が12名であった。市民はそれなりに長崎企業にメセナを期待しているようである。

(5) 中部講堂におけるコンサート

このコンサートは、長崎大学の一員としての筆者が、長崎大学への感謝の気持ちを含めて、多くの学生や教職員に聴いてもらいたい、との思いから設定したものである。チラシも既述のように多数用意したし、大学のHPにも載せてもらった。しかし、その思いと期待は残念ながら報われたとはとても言い難い。講堂自体が600名くらい収容できるので、空席は嫌でも目立った。

せっかくの名演は、むなしい結果となってしまったのである。演奏者の皆様には申し訳ない気持ちで一杯である。

日 時：10月5日（金）18:30～20:30
会 場：長崎大学文教キャンパス中部講堂
曲 目：プログラムの通り
聴 衆 者：約60名程度

始めに斎藤学長に挨拶をして頂き、筆者からもこのコンサートの趣旨の話をし、その後演奏が始まった。予想していたとおり、本会場は音の響きが余り無く、演奏会の会場としては不適切であると感じられた。特に弦楽器の響きが絨毯などに吸い込まれ、演奏者にとってはとてもやりづらいことであつたろう。それにもかかわらず、演奏自体は最高の出来で、感動した。もし、来年も企業メセナの実験をするとしたら、この会場は使えないであろう。良くない条件の下で素晴らしい演奏をした3名の音楽家に謝罪すると同時に、最大の感謝をしたい。皆さん、ありがとうございました。

ここでも上と同様のアンケートをしたので、その結果の概略を示す。
回収数32名、無記入もあり女性16名男性11名、年齢層にはばらつきがあつた。

- ①企業メセナの認知度：「知っていた」が12名、「知らなかった」が20名で、後者がやや多かった。
- ②「企業メセナ」の可否：「企業は社会貢献として積極的にすべきである」が28名と圧倒的に多く、回答はこの項目のみであつた。
- ③「芸術活動」の維持・発展の主体：「政府中心」11名、「国民個人」が8名、「企業中心」が6名、「民間団体」が3名であつた。「国民主体」が11名となり、「政府中心」と拮抗している。
- ④長崎における「企業メセナ」の実施：「全く知らない」が19名、「あまり行っていない」が12名、「少しは行っている」が6名で、「全く行っていない」が4名であつた。長崎の企業は、今回の我々の実験と同じ

く、もっとメセナ活動の広報を積極的に行う必要があると思われる。

- ⑤長崎の企業は「企業メセナ」を行うべきか：「大に行うべきである」が19名で圧倒的に多く、次の「余裕があれば行うべきである」の5名を大きく引き離している。

アンケートでは、多くの聴衆が演奏内容の素晴らしさを褒めたたえていると同時に、会場の環境の悪さと広報のまずさを指摘していた。

「1万円得をした」という記述があったが、これはまさに演奏のすばらしさを直接的に表してる言葉であろう。

4. 総括その1（演奏者の視点から）

ここでは演奏者を代表して大室の感想を載せる。

「大室晃子ピアノトリオ・コンサート」を終えて

長崎大学経済学部 of 菅家正瑞教授から、今年も「大好きな長崎へ音楽のプレゼント第二弾」として長崎で演奏させて頂ける、という報告を聞いたのは今年に入って間もない頃だったように記憶しています。昨年「大室晃子ピアノコンサート」と題し、長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」が動いてくださって、小学校や病院へのアウトリーチ・コンサートを含め長崎で4回のコンサートをさせて頂いたのですが、外海地区の黒崎東小学校、続く病院や美術館での「トークコンサート」は私にとって初めての経験でした。テレビの放送も入ったこともあって緊張し、本当にいろいろな反省があったのですが、そこで学んだことによって大きく成長できた実感があったので、「もう一度長崎で機会があれば」と切望していただけない、菅家先生の報告は私にとって大きな喜びでした。

今年「第二弾」として、元日本フィルハーモニー首席チェリストの奈切敏

郎さん、長崎大学准教授でいらっしゃる加納暁子さんのお力を借りてトリオを中心にする、という提案を菅家先生から受け、それならばピアノトリオの王道をいく名曲メンデルスゾーン作曲のピアノトリオ第一番をぜひ演奏したい、と希望させて頂きました。この曲は三十分以上かかる大曲なので、コンサートのプログラムの中では後半にこの一曲を配置するとして、あとはどのように選曲していこうか、と菅家先生と相談したところ、「ドイツの街ライプツィヒで活躍した作曲家」というテーマにし、バッハとメンデルスゾーンを組み合わせではどうか、という結論に達しました。そこで前半は3人がそれぞれバッハのソロの曲を演奏、後半にメンデルスゾーンのトリオという本格的なプログラム、病院や小学校では簡単で聴きやすい短いソロ、トリオの曲を中心に弾くことが決まりました。

昨年と同じく小学校や美術館、病院をまわり、本格的なコンサートは旧香港上海銀行長崎支店跡記念館ホールと長崎大学中部講堂で弾かせて頂ける、とのことで本当に楽しみにしていました。本来ならば室内楽の演奏会は、共演者と気心が通っていないと沢山のリハーサル時間が必要とされます。今回、初めてお目にかかる加納さんは長崎在住、私も直前までドイツのほうで活動していたので、長崎入りしてから3人でリハーサルをし、すぐにコンサート活動が待っている、という過酷なスケジュールでした。しかし、奈切さんのような日本の音楽界を引っ張っていらした実力者と優秀な加納さんのおかげで、最初のリハーサルをしたときから高水準の演奏ができ、奈切さんのリードでさらに高い仕上がりになり、最初の病院でのコンサートから素晴らしい演奏ができたのではないかと自負しています。

病院でのコンサートは、昨年を感じたことですが、本当に音楽を切望されていていらっしゃる方が多く、とても温かい雰囲気になれ、私も多くのことを学ばせて頂きました。後日ひょんなことからインターネット上のブログに、入院患者さんが演奏会の様子を書き込んでくださっていたのですが、その感想は演奏者冥利につけるものでした。

続く福田小学校でのコンサートは、全校生徒が600人の大きな小学校、また演奏者も3人いたことから、昨年のように生徒との密接な関係を築く、というところまでにならなかったことが残念でした。しかし、後日菅家先生を通じていただいた校長先生からのお手紙は、奈切さんがお話なさった「ヴァイオリンやチェロという楽器は何百年という歴史を生き続けている楽器である」ということに生徒が感銘を受け、その後の学校生活においても古いものを大切にしようという空気ができた、との報告でした。確かにいわゆる「クラシック音楽」というのは楽器だけでなく、天才といわれた作曲家たちがその独自の感性で時代の真実を切り取って作曲し、その魂が今に生き続けるものです。私たち演奏家の使命というのは演奏を通してその音楽の魂を伝えることであり、校長先生のお手紙から演奏家のあり方を再確認させられました。

午前中に行われた小学校での演奏の後は、同日の夕方、再び美術館で演奏でした。加納さんはその合間にも大学の授業をこなされながら一日に二度の本番であり、奈切さんや私に増して精神的に大変だったのではないかと思います。この美術館でのコンサート以降が一般公開の演奏会となるため、3人とも疲れを押し切り、張り切って臨みましたが、この日はおくんちの「庭見せ」の日ということで、ほとんど人が入らなかったのは大変残念でした。昨年は最初の小学校での演奏の日に地元のケーブルテレビが放映してくださり、新聞でも大きくインタビューを載せてくださったので、美術館のコンサートも立ち見の方が出るほどでしたが、やはり日程の調整やメディアの活用というのでこんなに差がでてしまうのには改めて驚かされました。そして、このあと2回の演奏会はどうなるのか、漠然と不安を感じ始めました。

予感が的中、というか旧香港上海銀行長崎支店跡記念館ホール、中部講堂とも、お客さんの入りはとても少なく、また中部講堂は弦楽器の響きには全く向かないこともあり、条件としてはとても弾きにくい現実がありました。それでもメンデルスゾーンの演奏は本当に3人それぞれがベストを尽くし、調和のとれた演奏をすることができた、という確信があり、また聴いてくだ

さった方々も心から満足してくださっただけに、本当に宣伝が行き渡っていなかったことが残念に思われました。今回は野村證券長崎支店さんをはじめ数々の地元の企業がバックアップしてくださったのですが、それでも「集客」というのは本当に難しいことなのだな、と改めて感じました。そしてメディアの力の大きさも実感しています。

私たち演奏家の一番の使命は、偉大な作曲家の遺した素晴らしい曲を、責任を持って演奏し伝えていくことですが、そこは「聴いてくださる方々」あってこそ演奏会が成り立つ現実があり、そのためにはどうしていくか、ということがますます問われている時代だと痛感しました。演奏家が伝えたい曲と聴いてくださる方々が聴きたい曲、というのは必ずしも一致しないし、コンサートが行われるにあたっては様々な方々からの支援が必要であり、またたくさんのお金が動き、時には過大な「宣伝」を行わなくてはならないことも事実です。本当に様々な要素が複雑に絡み合って実現している「演奏会」。これから活動していく中で、演奏者としてまず、演奏させていただける感謝の気持ちを忘れず持ち続けていくことを誓った「第二弾」の長崎滞在となりました。

最後に、まだまだ未熟な私を指導し、引っ張ってくださった奈切さん、素晴らしい演奏で聴衆を惹きつけてくださった加納さん、そしてこれらの企画・実行をほぼ一人で進めてくださった菅家先生に心から御礼申し上げます。そして、ぜひ来年も「第三弾」ができますことを楽しみにしています。

(大室 晃子)

5. 総括その2 (主催者の視点から)

主催者側から今回のコンサーを振り返って見ると、以下のような成果と反省点が残った。

(1) 評価すべき点

- ①演奏内容の充実：コンサートの回が増えるたびに演奏の質が向上した。特に最後の記念館と中部講堂でのメンデルスゾーンは、最高の出来であった。聴衆の少なさが本当にもったいなかった。
- ②奈切の演奏指導：演奏の質の向上は奈切の指導によるところが大であった。奈切は東京ベートーベン・カルテットなどで沢山の室内楽の経験があるので、今回のコンサートでも指導的役割を担ってくれた。室内楽には演奏家の相性はもちろんのこと、優れたリーダーが必要であることを改めて認識した。
- ③奈切の解説：曲目解説などはほとんど奈切が行ったが、さすがベテランだけあって、適切な解説と状況に応じた話は、観客の心を開かせると同時に演奏者をリラックスさせ良い演奏に繋がったようであった。
- ④企業メセナの芽生え：企業メセナの主体は企業自身である。しかし、長崎では最初から本格的企業メセナが出来るとは思っていなかったもので、賛同企業を得るのには苦勞したが、企業メセナの意義について十分理解している企業の協力が得られたことは、筆者に勇気を与えてくれた。また、地元支援企業の中から、多くの企業が参加して共同でメセナを実施する「長崎企業メセナ促進会」のような組織設立の提案があったことは大きな収穫であった。

(2) 反省すべき点

- ①準備の不十分さ：昨年のコンサートは一種のハプニングから生まれたもので、時間も心の準備もなくただ闇雲に実施した感があったにもかかわらず、それなりの成果は得られたと自己評価している。今回は、時間も心の準備も十分にあったはずであるが、結局最大のイベントである記念館と中部講堂での客の入りの少なさは、大学評価の用語でいえば「目標が達成されたとは言えない」というところであろう。前回の成功が今回の不成功をもた

らしたと言っても良い。経営学的に言えば「成功は失敗のもと」なのである。

②開催時期設定の誤り：今回の一連のコンサートは10月2日から5日までに設定した。理由は去年は9月初めに行ったので少し暑すぎる（特に学校では）と感じたからである。ところが、長崎最大のイベントである「おくんち」とその前行事の存在をすっかり忘れていた。市民の関心はほとんど「おくんち」に向けられていたのである。さらに、「長崎音楽祭」なるものが県で企画され、多くの音楽会が10月に集中することになり、我々のコンサートはそれらに埋没してしまった。企業経営に不可欠な「情報収集」の不十分さが現実に見えてしまったのである。

③支援企業との「コミュニケーション」不足：今回は企業の協力が得られたので、集客についても協力が得られるものという先入観があった。もちろん、集客に積極的に協力してもらった企業もあったが、結果としては集客に失敗してしまった。これは、やはり企業メセナという企業活動に対する意識の相違にあると思われる。企業メセナについての企業との対話がもっとも必要であることを実感した。経営学でも「意思疎通」は大きな問題の一つである。

④メディア活用（チラシ作戦）の失敗：去年は長崎では誰も知らないと言って良い大室を長崎に売り込むという困難な課題があったので、可能な限りメディアの利用を考え実行した。今回は、上述したように協力企業に依存しすぎ、メディアの力の大きさを体験していたにもかかわらず、もっぱら「チラシ作戦」で臨んだのが失敗であった。メディアも「おくんち」取材で手が一杯でとても我々に付き合う余裕はなかったようである。大学においたチラシも大量に残り、あわれ熱と灰になって消えてしまった。「客観的状況分析」が足りなかったのである。経営学的に言えば「情報収集」の失敗である。

6. おわりにあたって

この報告書を終えるに当たり、支援企業である野村證券長崎支店 安富昭人支店長をはじめたくさんの方々にご尽力をいただき、大きな励みとなった。いちいち個人名を挙げることは差し控えさせて頂くが、この方々のご支援がなければ、このような「企業メセナ」の実験は実行し得なかったであろう。ここに、関係者に深く感謝したい⁽¹⁾。

注

- (1) 本企業メセナの実施あたってかかった経費は、出演料、旅費、滞在費、調律費、チラシ印刷費など概算で70万円弱であった。支援寄付金60万円より8万円弱の赤字であったが、不足分は研究会の資金で補填した。

以 上